

チンポよ、立て！

小さい頃から

訳も分からず気になる部品だった

時には、人生上の大問題を提起したり

自分の体とは別に

勝手に動く指のようにも思えた

しかしそれが指よりも

もっともっと心臓に近い器官のように思えだした

のはいつだったか

時には不気味な噴火を繰り返し、死の裏側を見せる

ようでもあった

女性という存在の輪郭が見え始めたのも

その頃だっただろう

老いてからのチンポは

ピエロのようなものだ

哀れな皺で同情を誘い

歌いだしたげな悲しさで一杯

ユーモアも添えてキスでも求めるような素直な姿

自分の唇が届かないのが神の配慮かもしれぬ

この醜い部品が、美しい女性との渡し船とは

人生、真に皮肉にできている

チンポよ

そろそろお別れだ

風呂に入るたびに

ここだけはいまだに黒い髪飾りに敬意を表しながら

思わずニンマリと笑う

ぐっと握手を試してみるが

手応えもコンニャク程度

まるで怒りを感じず、まるで愛を感じない

そろそろ終わりだな

寂しいが未練もある

僕の人生を裏から左右してきた

素晴らしい忍者のような

このチンポに、敬意を表する

億光年の速度で立ち去ろうとするこの世に、グッド

バイ!

寂しい、寂しい、グッドバイをぼそっと呟く

(2011.1.30)